



東日本大震災に際し人文学・社会科学系研究者は何を 考え行動し、発信してきたか

著者	吉田 優貴
雑誌名	明治学院大学社会学部附属研究所研究所年報 = Bulletin of Institute of Sociology and Social Work, Meiji Gakuin University
巻	46
ページ	177-194
発行年	2016-01-06
その他のタイトル	A Study of Humanities and Social Sciences Scholars' Thoughts and Behaviors Related to the Great East Japan Earthquake
URL	http://hdl.handle.net/10723/2605

東日本大震災に際し人文学・社会科学系研究者は 何を考え行動し、発信してきたか

吉田 優 貴

本稿では、人文学・社会科学系研究者が東日本大震災に際し、何を考え行動し、発信してきたか、いくつかの分野の論考を取り上げて検討する。まず、研究者が人々の中でいかなる存在であるのか、研究者の「研究者」としての側面と「一人の人間」としての側面がどのように出てきてしまうのかを考察する。次に、災害や被災経験をどのように捉えることが可能か、あるいはどう捉えるべきか、「記憶」および時間観念と関連づけながら考える。最後に、「一人の人間」として被災地・被災された住民の方々と向き合うことが重要であるが、一方で被災地調査における「研究者」という立場や組織力もまた必要であったことを示す。

キーワード： 東日本大震災、研究者、日常、「記憶」、時間、調査

I 研究者として、一人の人間として 1 「研究者」という存在：序にかえて

見ることから始めてください。お待ちしています [菅 2013: 1]。

学者・研究者へ対する被災地の当事者の感情は、もはや不信感から怒りへ変わりつつあることに気づいてください。「俺たちは、学者のモルモットじゃない」と語る被災地の人々の声があります。大学教授がさも当然のように被災地へ来て、フィールドワークと称し、津波で全財産を失って先行き不透明な暮らしの中で、仮設住宅で暮らす人々を呼びつけて、同情然として話を聞き歩く。ひとつやふたつの大学、教授、研究者ではありません。たくさんの研究者に対しての声です。……学者、研究者のみなさん、まずは、ご自分の身銭をきって観光へいらっしゃってはいかがでしょうか。研究から離れた場所で、被災地へ訪れてみることも必要と思います。何日でも泊まって、ここにどんな暮らしがあるのか、じっくり

この文章は、宮城県、南三陸町出身の歴史社会学・日本思想史専門の研究者、山内明美が東日本大震災からちょうど1年が経とうとする2012年3月10日に自身のブログで訴えかけた言葉を菅が『「新しい野の学問」の時代へ：知識生産と社会実践をつなぐために』[菅 2013]で引用したものである。

東日本大震災から4年半以上が過ぎた今、論文、図書・雑誌や博士論文などの学術情報を探索できるCiNii(NII学術情報ナビゲータ)のサイトの検索窓に「東日本大震災」と入力すると、22,616件がヒットする(2015年10月2日時点)。興味深いことには、年別に同じワードで検索をかけてみると、2011年は該当する論考が8300件にのぼるが、2012年は7112件、2013年は3612件、2014年は2523件、2015年は残り2ヶ月を残すとはいえ1069件と減少傾向にある。何らかの形で

公表された論文情報をCiNiiが100%網羅しているとは限らないし、東日本大震災に関連するすべての論文が「東日本大震災」という語を用いているわけでもないだろう。それでも特に2013年の件数が2012年と比べて半数近くに減っているということは示唆的である。このことから推測できることは、「東日本大震災」という語を用いた論考すべてが被災地・被災した方々に対する直接的な調査に基づいたものではないとしても、震災直後に被災地に調査に向いておきながらその後さまざまな事情はあるにせよ被災地から足が遠のいてしまった者⁽¹⁾、研究の継続を断念した者がいることである。あるいは、なかなか論文という形にできずにいまなお苦闘している研究者もいるだろう。

山内が用いた「大学」、「教授」、「学者」、「研究者」という言葉は、機関や肩書きについてのニュートラルな表現であるというよりも、それらの存在が被災した住民たちと単に距離があるだけでなく高みに立った存在であることを表していることが文脈から読み取れる。そういう「研究者」に対する「ご自分の身銭をきって観光へ」、「研究から離れた場所で」という言葉は、言うまでもなく、もし研究のために被災地を訪れるようなことがあるのなら、「研究者」としてではなくまず一人の人間として被災地に「何日も泊まって、ここにどんな暮らしがあるのか、じっくり見る」べきだということを意味している。

この山内のブログを引用した菅が述べているように、震災を契機に被災地に雪崩れ込んだ、そしていまも雪崩れ込んでいる研究者や専門家の行為のすべてが独善的、あるいは利己的ではなく、「その多くが、苦悩に喘ぐ地域と人びとを大いに励ましたであろうし、また現実に人びとを救った」[菅 2013: 2] だろう。ただ、「研究から離れた場所で」という山内の言葉を考え

ると、震災以前から研究者という存在に潜在的にあった根本的な問題が震災という非常事態によってあらわになったと考えられる。それは、日常生活における「教授」や「学者」や「研究者」の存在である。「研究者」の端くれとして私も含ませていただくが、私たちは「研究者」としてではなく人として普段どういう生活を送っているだろうか。自戒を込めて書くが、「社会に貢献したい」と言いながら、職場や家庭で最も身近でかつ立場の弱い相手には「研究」にかこつけてときに傍若無人な振る舞いをしてはいないか。「何事もない」日々の一つ一つの行いが、震災という非常時において一遍にまとめてむき出しになるのである。

東日本大震災は「被災した住民」と「研究者」などのような人間同士の関係を浮き彫りにするだけでなく、別の力関係も改めて浮き彫りにした。それは「東京」と「東北」、「中央」と「辺境」の関係[小熊 2012]である。もちろん「東京」も「東北」も、「中央」も「辺境」も実体はなくある関係の中で作られた概念である⁽²⁾[小熊 2012: 4]。

「辺境」が存在しないように、「東京」も存在しない。われわれはすべて、「辺境」に住んでいる。「辺境」からはじめるとは、幻想の中央にむかって憐れみを乞うことでもなければ、遠くの誰かの災害を思いやることでもない。それは、自分の足元から、現代を問うことにほかならない [小熊 2012: 5]。

山内は『「辺境」からはじまる：東京／東北論』[赤坂・小熊 2012]の中で、〈東北〉という表現を用いながら次のように述べている。

本土と地続きでありながら、『正史』に接

東日本大震災に際し人文学・社会科学系研究者は何を考え行動し、発信してきたか

ぎ木され、自己の歴史を遡れないような時間的断絶を有する土地を、仮に〈東北〉と呼んでみる。〈東北〉は南北に宗主国と植民地、さらに東西に発展(資本主義)と途上(共同体社会)の狭間に位置する。こうした資本と権力の地勢図にあって、〈東北〉は、その身体を引き裂かれるような鋭い尾根の突端に位置する。もっと言ってよければ、ここは資本と権力をめぐる加害と被害が往来する土地でもある。だが、東北が置かれている場所を、底のない絶望と結びつけて論じるつもりはない [山内 2012: 255]。

「首都圏」に生まれ育ち、都内の大学に進学し、都内で非常勤の研究員と講師を務めている私は、被災地あるいは被災した方々といまだにどのように関わればよいのか、関わるができるのかわからない⁽³⁾。拙稿 [吉田 2015a] でそう述べたところ、それをお読みになったある方が「自分探しをしているように思える」と率直に感想をくださった。しかし、東日本大震災から4年半たった今になって、個人的にいえば「東日本大震災」を使って「自分探し」をするのではなく、フィールドワークに基づく研究を行う文化人類学を専門分野とする者として自分なりにではあるがきちんと向き合いたい。

本稿では、被災した方々ではなく、東日本大震災をめぐる研究を行ってきた人文学・社会科学系の研究者に照明を当てる。私にとっては「彼ら」でありかつ「私たち」とも表現できる研究者たちが、東日本大震災に際して何を考え行動し、発信してきたのか、研究者の役割や責務についてどのように考えてきたのか、いくつかの論考に基づいて記述する。

ただし、先のCiNiiのサイトで見つけたもの、また各論文の文献表から辿ったもの、著者に直接紹介されたもの、GoogleやAmazonのサイト

で検索して見つけたものをできる限り集めたが、人文学・社会科学の諸分野を網羅できたわけではないし、本稿で取り上げたものが各分野を代表したり代弁したりしているわけではない。しかし、限られた数の論考でも分野を横断して突き合わせてみると、(1)震災に関する各分野の研究者としての姿勢や各分野特有の問題意識だけでなく、(2)分野こそ違えいくつかの問題意識を共有していることや、(3)いくつかの論考が共通した記述の仕方(記述の段取り)を踏んでいることなどがわかった。

本稿は研究ノートとして、今回集めることのできた文献に書かれていることをいくつかのトピックに分けて紹介し、それぞれの分野の研究にとって、あるいは人文学・社会科学系の研究者にとって何が課題として見出せるか展望を述べたい。

2 研究者は常に「研究者」として生きているのか？

今回文献を集めてみて特に印象的だったことは、いくつかの論考の書き出しや論文集の「まえがき」が2011年3月11日のそのとき、著者たちは何をしていたのか、それはどういう体験だったのかを記述していることである [e.g. 平川 2011; 三宅 2011; 稲田 2012; 小林 2012a; 小松 2012]。しかも、そうした記述のほとんどは、かなり具体的かつ詳細にわたっていた。多かれ少なかれ個人的な体験が研究や論考で扱うテーマに影響を及ぼすことはあるかもしれないが、通常、研究会などの場において口頭で話すことはあっても文字媒体で残る学術的な論考の中で触れられることはほとんどない。むしろ「触れてはならない」向きがある。

それぞれの著者の当時の居場所と専門分野との組み合わせを挙げると、〈移動中、宮城県、歴史学〉、〈移動中、東京都、歴史学〉、〈職場、

宮城県、方言学)、〈職場、山梨県、図書館員・日本文化研究〉、〈自宅周辺、東京都もしくはその近郊、教育学〉となっており、必ずしも発災当時東北地方に在住・在勤だった研究者に限らない。ほかにも、例えば東北大学方言研究センターによる『方言を救う、方言で救う：3.11被災地からの提言』[東北大学方言研究センター2012]は、巻末に「震災を体験して：執筆者から一言」というタイトルで、執筆者それぞれが発災直後のことやその後の自分の身の回りのことについて記したものを掲載している。また、東日本大震災ではなく、阪神・淡路大震災の経験から書き出している研究者もいる[e.g. 戸江2012]。

こうした研究者自身の体験談を論考に掲載することは何を意味しているのか。ここでは発災時の自身の体験と直接関わりのある議論を展開している稲田の「研究ノート・東日本大震災：図書館／図書館員／日本文化研究者ができること」[稲田2012]を取り上げたい。まず彼女の体験について一部ではあるが引用しよう。

平成23年3月11日、筆者は勤務している図書館の事務室にいた。いつも通りの午後。それが、午後2時46分に急変する。図書館を襲うゆっくりとした揺れ。最初はさして恐怖心はなかったが、揺れは徐々に増幅していく。「地震が来ています！書架から離れて下さい！」カウンター職員の叫び声を聞いて、筆者はやるべきことを思い出した。利用者用の休憩室へと駆け上がる。休憩室には、数人の利用者がいた。皆、突然のことに茫然としている。「揺れが大きい！座って！」他の職員の叫び声で、利用者と一緒にしゃがみこむ。閉じこめを防ぐため、体全体で休憩室入口のガラス戸を押さえながら、「このガラスが割れたら、私は多分死

ぬだろう」などと一瞬思った[稲田2012: 87]。

図書館員として発災当時山梨県内の勤務先にいた稲田は、「図書館開館中に地震が発生したとき、最初を守るべきものは人命である」と述べている。その上で、情報集積地である図書館で迅速に情報を入手したい場合、利用者はまず図書館員にたずねるためこれに対する準備を日頃から行っておかねばならないと記している[以上、稲田2012: 86]。具体的には、停電時に備えてラジオなどの準備はあるか、入手した情報を整理し提供するための道具(ホワイトボード、模造紙、付箋、マーカーなど)は迅速に取り出せる場所にあるかということである[稲田2012: 86]。さらに当日、地震に関する情報をインターネットで得る際、アクセスが集中することが予想できた気象庁ではなく「サーバが安定して閲覧しやすいことが予想でき」[稲田2012: 85]、かつ「より画面が見やすい」[稲田2012: 85] Yahoo! JAPANの地震情報を選択したという。稲田によれば「普段からの経験に基づき、ほぼ反射的にできたもの」[稲田2012: 85]である。改めて言うまでもないかもしれないが、普段の行いが発災時にもものを言うのである。

稲田はさらに、退館後に東京在住の家族と連絡を取ろうとした経験を例に挙げ⁽⁴⁾、災害時の情報の扱いについても述べている。加えて特にここで取り上げておきたいのは、図書館の機能について述べている部分である。稲田によれば、県内の図書館関係者から「県内の図書館の被害状況を集め、一覧表を作ってインターネットに公開すべきだ」という声が挙がったが、稲田は「一蹴した」という[稲田2012: 83]。「県内でも被害は皆無ではなかったが、長期閉館になるようなところはない」[稲田2012: 83]とし、「図書館としてもっとやるべきことがあるのではな

東日本大震災に際し人文学・社会科学系研究者は何を考え行動し、発信してきたか

いか。自分を含め、図書館員が世の中とどこかずれているのは認識していたが、今回の震災でもそれが露呈する形となった」[稲田 2012: 82]と稲田は記している。稲田は別の論考で次のように述べている。

平日の昼間に街に出ると、いろいろなことに気がつく。地方都市の中心市街地を歩いている人がいかに少ないか、病院がいかにお年寄りで埋め尽くされているか、幼い子どもを連れて買い物をする母親たちがいかに大変な思いをしているか…世の中で叫ばれている各種の問題を、そして世の中の動きを、われわれ「司書」は街に出ることで目にすることができる。だが、そうして目にしたものを、「司書」はどれだけサービスに反映させているのだろうか [稲田 2009: 225]。

公共図書館の司書は土日勤務を行う代わりに平日が休日として割り当てられる [稲田 2009: 225]。稲田が強調しているのは、「世の中で叫ばれている各種の問題」を知っていたとしても、実際に直接自分の目で見てさらにそれを職務に生かすことができているとは言いがたいということである。公共図書館の場合、少なくとも大学などの研究機関に比べ「一般市民」の方々と接する機会は多くなるはずだが、それでも先に引用したように稲田は「図書館員が世の中とどこかずれている」[稲田 2012: 82]と指摘している。ましてや、大学に所属している「研究者」は一日の生活の中で「一般市民」の方々と深く接する時間は限られているか、もしくは全くないこともある。

教育学に身を置く小松も稲田と同様の問題意識をもっている。彼は、岩手県山田町、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市などを調査した

が、「研究者としての価値観の転換、研究者としての在り方などに悩む日々を過ごしている」[小松 2012: 53]と記しつつ次のように述べている。

考えていることの第一は、研究者としての責任と科学の非社会性に関する疑問である。研究者として、自分には何ができるのか、どのような関わりを持つべきなのか…研究者は何のために研究するのか、誰のための科学かという根源的な悩み…研究が人々の日常の生活から遊離しすぎていないかという疑問もわいてきた [小松 2012: 53]。

もし、人々の日常の生活から遊離した状態にある研究者が「調査」や「支援」という名目で非常時に被災地に入れば、冒頭で引用したような状況を作り出すことになるだろう。また、仮に良好な関係を築けたとしても、「研究者」としてしか話ができないのなら、相手が本当に必要としていることを引き出すことは難しい⁽⁵⁾。

小松は、「研究者」としての自分に加え、「一人の人間」として東日本大震災という事態をどう考えるべきか悩んだという。というのも、「10年ほど前、原子力発電の重要性や必要性を信じ、その啓発活動に少しばかりながら、関わったことがある」からだ。彼は原子力文化振興財団が行っていた啓発活動の中で、学校から公募で集めた作文やポスターの選考に数年間関わった。そのときは原子力発電について自分なりに勉強したつもりだったが、「今から振り返れば、提供された情報をただ信じて、行動していたと反省せざるを得ない」という [以上、小松 2012: 51-52]。彼は震災と原発事故を契機に、先に引用した「価値観の転換」を研究者としても一人の人間としても経験したのである。

震災後、多くの研究者や研究機関、各学会が、「××学では何ができるか」、「△△研究者として何ができるか」ということを真剣に考えてきた。震災後定期的にそうした名目で大小さまざまな研究会が催されている。もちろん、それぞれの分野で何ができるかということを考えるのは必要不可欠なことである。だが、それと併せて日常生活の中で、そして一人の人間として考えなければならないことが多くあるのではなかろうか。

ただし、それは結論を出すことが難しい課題である。「こうあるべき」という正解がはっきりとあるわけではないからだ。歴史研究者である奥村は、自身が大規模な自然災害と正面から取り組み始めたのは阪神・淡路大震災で職場のある神戸大学を含む地域が大きな被害を受けた時からであるとした上で、次のように述べている。

どんな責務があるのかというよりは、大震災を眼前にして歴史研究者として何かできることがあるだろうか、どうしたら具体的に行えるのだろうかということであった。歴史資料ネットワーク⁽⁶⁾の活動について、当時「走りながら考える」と表現することが多かったが、大災害時に対する私自身の対応は、16年たった現在も変わっていない。…被災地にさまざまな働きかけを行った研究者の1人として、…いわゆる「歴史研究者の責務」を明確に位置づけて、その上で活動を進めるというスタンスをとってきたわけではなかった [奥村 2011: 21]。

奥村は述懐する。「歴史研究者が歴史学の素材である歴史資料を保全することは研究者として当然の行為のように考えられるかもしれない。しかし、阪神・淡路大震災の際、私自

身がそのことにすぐ気がついたわけではなかった」 [奥村 2011: 21]。彼は資料保全のために東京から神戸を訪れ活動しているNGO関係者がいることを新聞の記事で知り、初めて「研究者としてこんな活動ができるのだと気づかされた」 [奥村 2011: 21] という。つまり、奥村は「研究者」としてそれまで蓄積してきた知識や経験では不十分であるということに気づくことになったのである。同じく歴史研究者の平川も同様のことを述べている。「…率直に言って、歴史研究は今回の大地震・大津波の警告に役立つことはできなかった。貞観津波だけでなく慶長津波などをあげて、大津波の襲来を警告していたのは、アカデミズムの場にいる歴史研究者ではなく、在野の研究者たちだった。…災害史を調べ社会に提言するという、生きた歴史学を実践していたのは、郷土史家の人たちだったのである」 [平川 2011: 4]。

冒頭の山内の言葉を掲載した昔は、「野の学問」という言葉を用いながら次のように述べている。

…「野の学問」という表現の意味は、その学問の在野性であり、現場におけるフィールド科学性であり、人びとに資する実践性であり、権力や権威、そしてアカデミズムといった「何もの」かへの対抗性というエッセンスに求められるのである [昔 2013: 5-6]。

「野」の人たちとは異なり、専門性を追求することに精力を傾けてきた「研究者」の場合、日常生活にしっかりと根を下ろした研究や振る舞いをするのは容易なことではない。しかし、少なくとも発災当時の自分自身の直接的な体験から議論を出発した研究者は、「震災の体験を書く」という行為を通して「野」に立ち返るこ

東日本大震災に際し人文学・社会科学系研究者は何を考え行動し、発信してきたか

とになったと私は考える。彼らの多くは、「東日本大震災が経験したことのないあまりに衝撃的な出来事だった」という理由だけでその体験を記したのではないのではないか。そして「野」から自分の、自分たちの研究を見直そうとしたのではないか。

東日本大震災のような災害は「非日常」と言われる。しかし、研究者としての生活の方が多くの人々にとっては非日常であり、それが当の研究者にとって日常化することで、研究者は「野」にある「ありふれた」日常生活上のさまざまなことに疎くなる。あるいは、限られた見方でしか日常を眺められなくなる。そこに、日本では人々の日常においていつでも起こりうるはずの出来事、つまり日常生活に残念ながら潜在的に存在している大震災が起きたと言える。

他方、あまりに人々の日常に密着した営みだからこそ、研究者としての知見が生きる場合もある。例えば、人々が話す言葉＝方言をめぐる支援と研究である。言葉＝方言はもともと人の生活に直に関わるものである。しかし、方言学者小林によれば、大震災という緊急時において「方言が人間の生死に関わるものとは思えないというのが普通の理解」[小林 2012b: 2]であり、「方言は、私たちにとってあまりにも日常的で当たり前存在でありすぎた」[小林 2012b: 2]。そこで小林をはじめとする東北大学方言研究センターが「被災地域の方言の再興及び地域コミュニティの再生に寄与することを目的として」[大野・小林 2015: iv] 支援事業⁽⁷⁾に乗り出した。「方言の研究者が意識的・直接的に方言の活性化を支援することは、これまであまりなかった」[大野・小林 2015: iv] が、彼らは研究者である前に「野」にいる一人の人間として、被災した住民たちと関わったのである。「この事業に関わった研究者たちの多くは被災した地域に暮らす生活者でもあって(直接被災した方

も含まれる)、いわば隣人として被災地に寄り添い、祈るような気持ちをもってこれらの事業に取り組んできた」[大野・小林 2015: iv]。先の小林によると、「地震発生直後、私たちの取り組みは、これまで調査でお世話になった方々にお見舞いの手紙を送ることや、ホームページに被災者を励ますメッセージを掲載することから始まった」[小林 2012c: 223]。同書の執筆者の一人である田附によれば、家族宛の見舞いの手紙の中で予め申し出た上で、過去の方言調査協力者の中で新聞によって亡くなったことがわかった方の録音声をCDに焼き、後日その家族宛に送ったという [東北大学方言研究センター 2012: 222]。

Ⅱ 災害や被災経験をどのように捉えるか：時間観念との関連で

2013年、関西社会学会の機関誌『フォーラム現代社会学』で「3.11以前の社会学：阪神淡路大震災から東日本大震災へ」という特集が組まれた。これは、「『3.11以前』の社会学研究のなかに『3.11以後』を読み解く知を見出そうという試み」[荻野 2013: 96]である。報告者には、3.11以前から、特に阪神・淡路大震災を契機に災害の社会学的研究に携わっているか、もしくは阪神・淡路大震災の被災経験を持つ研究者が選ばれている [荻野 2013: 96]。

本章では、この特集に含まれている「震災を忘れてるのは誰か：被災遺物の保存の社会学」[今井 2013]を足がかりに、私たちの日常にとって、また学問にとって「過去」と「現在」の関係はどのようなものなのか、また震災を考えたとき、「過去」はどのように扱うべきなのか考えたい。

今井は、「震災の記憶」という自身の研究テーマから阪神・淡路大震災と東日本大震災との連続と不連続を考えることを目的として、「被

災遺物」の保存について議論を展開している。前提として、災害を社会学の対象とする場合、「社会」の変化に社会学のアウトプットが追いつかないという研究上の困難は、社会学が災害そのものというより「被災後の社会(の変化)」を対象としているからだ指摘している[今井 2013: 98]。その上で、災害を一回限りの出来事としてではなく何度も起こりうる出来事として捉えなければならないと述べている[今井 2013: 98]。

この指摘はその後に続く「被災遺物」の保存による「時間の分節化」の議論につながっている。今井によれば、阪神・淡路大震災で被災したほとんどの自治体が「震災祈念施設」の整備を復興計画に含めなかった一方、東日本大震災においては被災した多くの自治体が、震災の記憶や教訓を伝えるための「震災祈念施設」の整備を復興計画に含めているという[今井 2013: 99]。

その一つ、東日本大震災における陸前高田の一本松のような「被災遺物」⁽⁸⁾は、『あのとき』の状態のままであり、時間が流れていない『時間軸の一時的な失効』の状態にあるが、その状態が「あのとき以前／あのとき／あのとき以後(から今)」という形で時間軸を分節化する[今井 2013: 100]。今井によれば、Tシャツや絵はがきやステッカーなど陸前高田の一本松にちなんで製作されたグッズもまた「(商品として利益を上げることを期待されているのではなく)『震災を記憶し、伝える』ためにつくられ」、それを手にすることにより「被災遺物がある場所以外で、時間を『あのとき』の『まえ』と『あと』に分節化」[今井 2013: 101]する。それを「日常生活の中に『震災の記憶』を埋め込んでいく行為として捉えることができる」[今井 2013: 101]のである。この「被災遺物」の保存や(グッズなど)別の形にすることが、震災を一回限り

の出来事にしないのと同様に、「社会学もまた災害を一回限りの出来事として捉えてはならない」[今井 2013: 102]と今井は説く。その観点で、「東日本大震災について研究するときには、つねに阪神淡路大震災を参照し、その連続と非連続」において災害を捉えることが、「一回限りの出来事ではなく何度も起こりうる社会現象として災害を捉えることになる」と議論を締めくくっている[今井 2013: 102]。

この点について歴史研究者たちは、阪神・淡路大震災よりもさらに「過去に遡る」貞観地震について、アカデミックな場にいる自分たちがまったく議論をしてこなかったことを問題点として挙げている。既に取り上げた通り、平川は貞観地震に着目していたのは郷土史家の人たちであり歴史研究者ではなかったことを指摘したが、保立もまた、東日本大震災の歴史的な原型として、869年に発生した「貞観地震」があったことは地震学研究者によって明らかにされたと指摘しつつ[保立 2011: 8]、さらに歴史学それ自体のあるべき方向性に突っ込んだ議論を展開している。保立は「歴史学の側でまず確認すべきことは、この(貞観)地震・津波についての歴史学者の専門論文が1本もなかった…もといえ、この時代の地震について論じた専門研究者の論文自体がほぼ皆無だったのである。…歴史学の社会的な責務という面からみると、これは研究課題の選択の基準に何らかの歪みがあったのではないかという反省をせまる」[保立 2011: 8]と述べている。

こうした、歴史研究者たちによる「震災前」の歴史学それ自体のあり方に対する発言を「(過去の)記録」の扱い方という観点で考えてみると、「時間」というものが今を生きる私たちにとってどのような存在なのか、より具体的には、私たちが「過去」、「現在」、「未来」として区切ることで捉えようとしていることは何なのかと

東日本大震災に際し人文学・社会科学系研究者は何を考え行動し、発信してきたか

いう課題に行き着くことになるだろう。

「記録を残す」ことについて、歴史研究者の三宅は次のように述べている。

記録を創り残すことには3つの意味がある。第1に、ともかく後世に役立つためである。時の経過と同時に記憶は薄れ、変わっていく。記録も記憶も変化する。…第2に、被害者の将来を支えるためである。とくに福島原発による今回の事態は、私たちがこれまで経験したことのない規模の被害になるのは間違いないので、いったい誰が何を言いどう決まり、結果として何が起きたのか、記録を作成して集団的に残していくことは、責任をきちんと問うていくために不可欠である。…第3に、大きく異なる意見があるにもかかわらず、ある決定をした、ないし決定がされた時に、以後の検証をきちんと行っていくためである [三宅 2011: 57-58]。

三宅は「記録を残す」ではなく「記録を創り残す」と記している。それは「記録も記憶も変化する」からである⁽⁹⁾。「変化」を認識するには、先の今井の言葉を借りるなら、時間を「『あ のとき』の『まえ』と『あと』に分節化」[今井 2013: 101]しなければならない。裏を返せば、意図的に分節化しない限り、「変化」は認識できないのである。

起点を設定するのはたやすい。しかし、終点は実際に起きてからでないとその点を打つことができない。「まだ起きていないが来るかもしれない／必ず来ると言われていること」に関して、今ここでその終点を打つことがリアリティを持つことはほとんどない。平川は「千年に一度の大津波」という表現が間違った意味で使われていたことを指摘している。

3月23日の『東京新聞』ウェブ版に、福島第一原発を設計した東芝の元社員の驚くべき証言が掲載されていた。元社員はマグニチュード9を想定して設計するよう進言したが、上司は「千年に一度とか、そんなことを想定してどうなる」と一笑に付したという。…貞観11年から「千年」後は、1870年前後である。明治の初めには「千年」だったのだから、「もうとっくに千年は越えている」という認識になってもよかった。だが、「千年に一度」の言葉はどういうわけか、めったにない、という意味で使われていたのである。だからこそ、すでに千年を越えていても危機感を抱くことがなかった [平川 2011: 3]。

平川によれば、東北の太平洋沿岸は津波の「常襲地帯」[平川 2011: 3] だという。貞観津波以降に大津波は何回も発生しており、例えば歴史記録には慶長16年(1611年)に仙台湾から三陸地方一帯を襲った、いわゆる「慶長津波」の記事がある。慶長津波は貞観津波から742年後のことであり、「千年に一度」ではなく、「七百年に一度」は来ていたことになる。2011年はその慶長津波からちょうど400年であり、今後は「四百年に一度」を生きた言葉にしていく必要がある。しかし、1793年、1896年、1933年、1960年にそれぞれ死者・行方不明者の出た津波が襲来しており、「最短では27年、長くても100年から200年程度の間隔で襲来していた」[以上、平川 2011: 3]。

どの地震や津波を「歴史」の中に入れるのか、どれを起点とするのか。そもそも、時間自体には「起点」も「終点」もない中でどのように時間を区切ればよいのか。人の営みを中心に考えるのではなく、時間自体を中心に考えるのなら、私たちは常に「過程」(この表現も「起点」

と「終点」を暗に前提としているわけだが)を
生きている。恐らく、研究者にとっては、最終
的に「起点」や「終点」を設けることになった
としても、こと災害に関しては「過去」も「現
在」も「未来」もまずは連続した過程として捉
える必要があるだろう。他方、被災した方々に
とって、場合によっては「時間の分節化」が必
要となる。「終わりの見えない」日々は大きな
苦痛を伴うからである。逆に、例えば「復興は
終わった」などという言葉で彼らの意に反する
形で時間が区切られても、それを受け入れるこ
とはできないであろう。

本稿で深い議論はできないが、拙稿〔吉田
2015a〕で取り上げた岩手県内にあるA地区の
漁協関係者の語りについて再度考えてみたい。
2014年にお話を伺えた、A地区の漁協に深く
関わる上原さん夫妻(仮名)は、「今後どうした
らいいか」、「(漁業の)後継者(をどう確保す
るか)」、「魅力ある漁村にするにはどうすれば
いいか」と語ってくれた〔吉田 2015a: 75〕。私は
「これらの課題は、震災によって生じたという
よりも、震災前から意識されてきた課題」〔吉
田 2015a: 75〕としつつ『元に戻す』という意
味での『復興』を超え、将来を見据えた課題を
話してくれた〔吉田 2015a: 77〕と考えた。こ
こで、『元に戻す』という意味での『復興』を
超える』ということがどういうことか、「時間」
との関係で考えると次のことが言えるのでは
ないか。すなわち、上原さん夫妻の語りは、「現
在」を起点として「未来」のどこかに終点を打
とうとする、あるいは「成し遂げようとする」も
のではなく、もちろん「(震災前の)過去」を起
点としてその「過去」にできる限り「未来」を
近づけるといってもなく、「現在」と「未来」、
そして(震災前を含めた)「過去」を、連なった
希望の過程として捉えたものであり、そうした
希望の過程を生きることで困難を乗り越えよう

としているのではないか。

Ⅲ 研究分野の特徴、「貢献」をめぐる考え、 採用された調査法との関係

震災直後から、被災地での調査がいろいろな
形で行われてきたと思うが、冒頭で引用したよ
うな批判の対象になる研究者もいただろうし、
そうではない研究者もいただろう。さまざまな
分野の研究者や研究機関が被災地での調査を
行ったと考えられるが、本章では、被災地での
調査を含めた関与の仕方におけるスタンスを明
確に提示している二つの分野の論考を取り上げ
る。一つは文化人類学者による無形民俗文化財
調査⁽¹⁰⁾について、もう一つは宗教学者による
震災直後からの関与とその後の調査について書
かれたものである。両者に共通していることは、
(1)組織的な関与だったこと、(2)研究機関に
属した研究者という肩書きにより「信頼」を得
たことである。とはいえ、現地調査に関するそ
れぞれの分野の考え方はかなり異なる。以下で
検討してみよう。

1 文化人類学者による「人類学的ではない」 調査：委託調査事業を出発点にした関わり

私自身の専門分野である文化人類学／社会人
類学は植民地支配の歴史とともに歩んできたこ
ともあり、私見ではあるが「社会貢献」という
言葉を使うことにはかなり慎重であり、その言
葉を使わない／使えない／使いたくないと断言
する者も少なくないと思う。しかし、東日本
大震災による大津波と原発事故が連続して起
きた中で、人類学者の間では市民としてどう関
わるかという意識と、研究者としてつまり専門
的知識の生産に携わる学者としての貢献ができ
ないかという問いかけが広範囲に現れた〔高倉
2014: 290〕。ところが、高倉(東北大学)によ
れば、「人類学的知見は東日本大震災の被災に対

して直接的には役に立たないのではないかという否定的な論調が支配的」[高倉 2014: 291]だった。

「人類学的知見は東日本大震災の被災に対して直接的には役に立たない」という見方は、人類学的なフィールドワークが通常、ごく短期間の調査を長年にわたって繰り返すのではなく、月単位や年単位の長期にわたり現地に住み込んで人々とともに生活をしながら調査をするスタイルを採っていることに起因する。現地に住み込むというのは、宿泊施設に滞在するのではなく現地の人々の家に居候することを意味し、被災地においては「物理的空間としての居住地が津波で破壊された人びとが暮らす避難所や仮設住宅のコミュニティ」[高倉 2014: 291]に住み込むことになり、それは「調査倫理という意味でも、被調査者との信頼関係構築という調査方法に関わる点においても」[高倉 2014: 291]きわめて難しい。

高倉はこうした点を踏まえ、「ある程度着手しやすい調査のあり方とその効用について明示しておく」[高倉 2014: 292] ことを目的とし、被災した無形民俗文化財の調査事業という、「被災地において従来の人類学的なフィールドワークとはまた別な形で」「行政からの委託」[高倉 2014: 292] によって行われた調査の背景や内容、成果、そしてそもそも「無形民俗文化財とは何か」具体的かつ詳細にわたって記述している。なお、調査事業の実施にあたっては、東北大学東北アジア研究センターが委託先となった[東北大学東北アジア研究センター 2012; 高倉 2014]。

この調査では調査者が組織化され、各調査者は初回の調査でまず担当地区の市町村教育委員会を訪問するという形で始まった。そして教育委員会で民俗芸能の保存会の情報を得、多くの場合は最初のインフォーマントが保存会の代

表者となり、そこから芋づる式に話者を見つけていった [高倉 2014: 294]。この体制は、調査者にとっては調査地に入る以前の段階でインフォーマントを確実に確保できるという利点があり、市町村教育委員会からすれば、最初の紹介時にはどのような人間がどういった方法で調査に入って行くのかを確認できる利点があった [高倉 2014: 294]。さらに、調査を始めるにあたって、なぜ人類学者等が入ってきたのか「被調査者にもおおむね理解いただけたし、調査の目的についても表立って反対されるということではなかった」[高倉 2014: 298] という。

ここで、高倉の言う「従来の人類学的なフィールドワークとはまた別な形」とは、まず、行政との連携といういわば「トップダウン」の形をとって調査が開始されたということを示している。例えば、海外での人類学的フィールドワークでは、現地政府発行の調査許可証の申請と携行を求められることがあるが、それを持って地方行政の役人に調査する旨を申請しインフォーマントを紹介してもらう、ということはずまらない。多くは一人で町や村に入り、そこで出合いを積み重ねていくうちに居住地(居候先)が決まるものである。

また、人類学の現地調査は、通常、「仮説検証型よりは、課題模索型であることが多い」[高倉 2014: 297]。確かに、特定の課題をもって現地入りするが、生活をしているうちに設定した課題自体を見直さなければならないことに気づくことが少なくない。現地で生活する中で金鉱を掘り当てる(現地に入るまでは想像もしていなかったおもしろい研究課題を見出だす)ということもある。こうした「課題模索型」の調査は、ある社会のあらゆる領域を分析対象にできる利点もあるが、震災においてはむしろデメリットとして認識されてきた [高倉 2014: 297]。加えて、「人類学はむしろ既存の専門分野の知見を

相対化する、あるいはオルタナティブな視座を提供することには長けている」が、「そのような人類学的知の特徴は、今回むしろマイナスに働いた」〔高倉 2014: 297〕。災害支援の現場で専門的知見が有効に活用されるためには、専門分野自身が提示する研究領域と、支援の現場からのニーズがある程度合致している必要があるからだ〔高倉 2014: 297-298〕(強調は引用者)。

民俗芸能などの無形民俗文化財は、被災した地域コミュニティの再構築に寄与すると岩手県・宮城県・福島県の震災復興行政においてみなされている〔高倉 2014: 298〕。しかし、行政自体は調査研究を行わないため、無形民俗文化財行政に関わる専門分野として文化人類学、民俗学、民俗芸能学などがそのニーズに対応可能なディシプリンとみなされ、それらの分野に委託されるということになった〔高倉 2014: 299〕。高倉はこうした経緯を踏まえ、「人類学の知見が求められる応用性・社会的ニーズとしては、開発途上国の開発問題や地域紛争・難民問題といった領域がこれまで考えられてきた。そうしたものの一つとして無形民俗文化財という領域があるということを押さえておく必要がある」〔高倉 2014: 299〕と述べる。

以上みてきた通り、高倉らが行った無形民俗文化財調査は行政からの委託という点からも、組織的な調査である点からも、また明らかな課題と目的をもっている点からも、成果が「政策的課題への貢献」〔高倉 2014: 297〕という形で提示できる点からも、従来的人类学的調査とは大きく異なる。従来的人类学的調査の手法にこだわらないことによって「社会貢献」に寄与でき、さらに今後の人類学という分野ないしは人類学者による「社会貢献」の可能性を広げたということになる。

2 宗教研究者による発災直後からの組織的かつ積極的な関与とアクションリサーチ

前述の無形民俗文化財調査と宗教研究者による活動との共通点をまず挙げておきたい。第一に、「研究者」という立場により(少なくとも被災地の自治体から)信頼を得られたこと、第二に、組織的な活動が有効であったことである。

まず、「研究者」という立場が必ずしも被災地での活動に負の影響を与えるわけではないことは無形民俗文化財調査の経緯を見てもわかることだが、同様に、稲場によれば宗教界、行政、自治体から宗教研究者による関わりへの期待として、「行政や自治体にしても、一教団ではなく、宗援連⁽¹⁾のような学識経験者が参画しているアンブレラ組織ならば、連携がしやすい」〔稲場 2012: 237〕という意見を聞いたという。あくまで行政との関係についての話ではあるが、先述の無形民俗文化財調査と同様、「研究者」という立場が信頼関係にプラスの影響を及ぼした事例と言えるだろう。しかしながら、単に「研究者」という肩書きのみが非常時になってものを言ったわけではない。とりわけ「宗教者」による支援において「行政側、自治体の側には、政教分離を名目にした事なかれ主義も働いている」〔稲場 2012: 237〕ということだったが、「日ごろから、市の職員と宗教者が防災や社会福祉の取り組みでつながっている場合は、災害時にも連携がとれた」〔稲場 2012: 237〕という。非常時にどのような関係を築けるかは、やはり平時における関係にかかっているのである。

次に、宗教者・宗教研究者による取り組みが教えてくれたことは非常時における組織力の強みである。宗教者・宗教研究者の活動は発災の2日後の3月13日にスタートした。その日に宗教研究者が「宗教者災害救援ネットワーク」をFacebookで立ち上げ活動を始めた。同サイトは「宗教団体の被害状況・安否情報、対策本部・

東日本大震災に際し人文学・社会科学系研究者は何を考え行動し、発信してきたか

救援活動、募金呼びかけ・教団による義捐金寄付、避難者の受け入れ、祈り、供養、法要、心のケア」といった情報を共有・発信し連携する場となった〔稲場・黒崎 2011: 100〕。対照的に、こうした個々の団体を取りまとめる者(機関)が被災時になかった例として、歴史民俗系の博物館が挙げられる。国立歴史民俗博物館館長(当時)の平川によると、東日本大震災で沿岸地域の多くの博物館や文化財が被害を受けた際に、歴史・文化資料のレスキュー活動において浮かび上がってきた問題は、日本博物館協会の科学系、美術系、動物園・水族館などの館がそれぞれ館種別の組織を持っているのに対して、歴史民俗系だけ全国的組織がないことであった。美術系は全国美術館会議(全美)を持ち、動物園・水族館は日本動物園水族館協会(動水協)を持っており、平川によれば「震災後の復興に際して、全美・動水協の全国的支援体制は見事だった」〔平川 2013: 51〕という。しかし歴史民俗系は総数3000館という最大の館種でありながら、今回の震災時においては全国的ネットワークが全くなかった。このときの反省を踏まえ、2012年6月、国立歴史民俗博物館や江戸東京博物館など12館の館長を发起人とする「全国歴史民俗系博物館協議会」(歴民協)の設立集会が開かれた〔以上、平川 2013: 51〕。

さて、震災後の宗教者・宗教研究者による活動が迅速に行われた背景には、この組織力があっただけではない。もともと宗教研究者は宗教実践者および各宗教団体と即座に協働できる状況にあっただけでなく、原動力となる強い考えが彼らの活動を支えていたようである。

文化人類学者が「人類学的知見は被災地に貢献できるかどうか」という議論から出発したのに対し、宗教研究者(少なくとも稲葉ら)は、「宗教的利他主義、宗教の社会貢献を研究する者として、一人の人間として傍観者でよいのか」〔稲

場・黒崎 2011: 99〕、「宗教の社会貢献・利他主義を20年近く研究してきた者として、また、阪神淡路大震災で震災ボランティアをした経験者としても、遠く離れた地から何かできないか」〔稲場 2012: 219-220〕というように、「責務」としてというより「使命感」に突き動かされたことが窺える。

この「使命感」と震災直後から積極的な関与を目指していたことが、宗教研究者の稲場が採用した調査手法と密接に関わっているように考えられる。それは「アクションリサーチ」と呼ばれるものである。アクションリサーチとは「望ましいと考える社会的状態の実現を目指して研究者と研究対象者とが展開する共同的社会実践のこと」〔矢守 2010: 1〕であり「目標とする社会の実現へ向けて『変化』を促すべく、研究者は現場の活動に『介入』していく」〔矢守 2010: 1〕ものである。この点が「課題模索型」の調査を中心とする人類学と大きく異なる⁽¹²⁾。

アクション・リサーチは、フィールドワークで観察する研究者と、その対象者とのかわりが一方向ではない。観察をする研究者も対象者から観察され、双方向のうちに、新たな方向性が構築される場合がある。被災地に向かう時、研究者は、冷たい観察者となることはできないのだ。共同的社会実践なのである〔稲場 2012: 223〕。

アクションリサーチは(調査対象との)「共同的社会実践」を標榜するため、調査の相手に関して細心の注意を払いたいという姿勢がある。稲場は、宮本常一による「調査地被害：される側のさまざまな迷惑」〔宮本 2008〕⁽¹³⁾を引きながら次のように述べている。

相手の置かれている状況を考えずに、権威

を振りかざしてインタビューをしたり、長時間相手を自分の都合で拘束するなどは論外であるが、準備をして、調査地や調査対象者に迷惑をかけないようにと配慮しても、結果的に相手の迷惑になったり、相手の気分を害することになったりすることはある。筆者も被災地での調査では、特にこの点に留意して、慎重に進めている [稲場 2012: 224]。

調査を慎重に進め、「インフォーマントから一度了解を得た内容でも、そこに解釈・分析が入ることでインフォーマントの心理的ブレーキがかかる」 [稲場 2012: 228] ことがあり、「アクション・リサーチにおいて社会的力につながる一般化・分析は、現地のひとり一人の被災者・宗教者にとっては無意味で、自分たちの現状がよくなることにつながるのかどうか、という点が当事者にとっては重要」 [稲場 2012: 228] なのである。本稿では掘り下げられないが、被災された方々一人一人の個人的経験を長い時間の過程(「歴史」)の中にかかにして置くことができるのか、あるいはあくまで「一個人の経験」として「現在」のこの時点とその人にとっての「未来」についてのみ考えるべきなのか、難しい課題を稲場は提起していると言える。

IV むすび

本稿を締めくくるにあたって最後に取り上げておきたい論考がある。それは、文化人類学者竹沢が行った「調査」に基づく著作である。

彼の著書『被災後を生きる：吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』 [竹沢 2013] には次のように書かれている。

東日本大震災とその津波のニュースを見たときから、私たち親子は被害の大きさに打

ちのめされてしまい、テレビを見るときもなく眺めるばかりで、なにも手をつけられないでいた。…被災から2週間たっても現地の状況がいささかも改善されていないと知ったとき、私たちは話し合っ親子3人で被災地の支援に行くことを決めた [竹沢 2013: 12]。

竹沢は脚注に記しているが、最初の3回は自費で現地に行き、合計すると被災後の1年半のうち約半分の期間である合計242日間、岩手県の被災地で過ごし、その間に話を聞いた人の数は200人以上にのぼったという [竹沢 2013: 12-14]。この「調査」というより「経験」—被災した方々の経験でありかつ竹沢自身の経験—をまとめた著書は、学術用語が散りばめられることもなく理論的に難解な記述があるわけでもない。非常に平易な言葉で書かれており、被災した方々や当時の被災地の状況が竹沢の目と手を通して読者に伝わってくる。

ここで私は、竹沢が行ったことを模範にしたい／すべきだと言うのではない。むしろ、竹沢が行った「調査」は、前出の高倉が指摘している通りきわめて「例外的」 [高倉 2014: 292] である。この竹沢の著書を読むと、私などは研究者としても一人の人間としても全く何もしていない、何もできないことを痛感させられる。もちろん、彼は講義やゼミの拘束があまりない国立民族学博物館に勤務していただけでなく、家族の協力があつたからこそなし得たことである。そうした条件が仮に自分にも揃っていたとしても、人間としてこれだけの長期間にわたって被災地に滞在し被災した方々を支援すること—「支援」という熟語よりも、住民の中に入り住民と共に生活をする、と記述した方が妥当だ—は、容易ではない。

本稿を執筆する前に、私は被災地で調査を

行ってきた何人かの研究者に話を伺い、直接、研究者が被災地でどのような経験をしているのか、どんな問題に直面したのかを明らかにしようと考えていた。興味深かったことは、震災よりずっと以前から被災地となった地域で調査を行ってきたある研究者は、被災地で自身が研究者として直面した問題ではなく、被災地で何が起き、現在どのようになっているのか、住民の話を私に対してかなり具体的に話してくれたことである。伺った内容もさることながら、私の問いかけがなかったかのようにごく自然と被災地の住民たちの話をされたこと自体が私にとってとても印象的だった。その話しぶりから窺えたことは、震災前から研究者としてではなく一人の人間として住民たちとの間に信頼関係を築いていたことだった。

詳細は伏せなければならないが、多くのことを語ってくれた研究者の中でも、結局その内容は公表しないでほしいと言われ、すべてを私の胸の内にしまうことになったこともあった。研究者としてだけでなく一人の人間として、語ることはできてもそれを他人のフィルターを通して公表されることに強い抵抗感を持っているようだった。また、被災地出身の研究者の中からは、自分の出身地だからこそ震災に関する研究をやりたくないという声も聞かれた。研究者は研究者である前に、やはり一人の人間なのである。

最後に、自分自身の問題として記しておきたい。もし、何かできることがあるとすれば、一人の人間としての振る舞いに、研究者としてこれまで得てきた知見を加えることだろう。最大限努力し、批判も誠実に受け止め、それでもなお力が及ばないと知ったとき、調査や研究から潔く撤退し、間接的にでも一人の人間としてできることを模索したい。

【注】

- (1) 定池によると1995年の阪神・淡路大震災については、既存の災害研究者に加えて、ボランティア、家族研究、まちづくりの研究者など多様なバックグラウンドを持つ研究者が新規に参入しさまざまな成果が生み出されたが、これらの新規参入者の中には一定の成果を出した後それまでの研究領域に戻った研究者も多かったという。もちろん、他方では、震災から得られた知見をその後の災害対応や支援活動、研究活動に生かそうという試みも見られた〔定池 2011: 22〕。なお、総合防災情報研究センター(CIDIR)のホームページによると、定池自身は北海道南西沖地震を奥尻島で経験したことをきっかけに災害研究を志し、被災地復興・地域防災に関する研究と防災教育活動に取り組んでいるということである。
- (2) 従って、「辺境」の問題は、地理的な意味での「東京」にも存在する〔小熊 2012: 4〕。
- (3) 私は「『東京出身』である」ということを普段は全く意識していない。しかし、私的な例で言えば婚家は富山県であり、一親等二親等とも現在継続している例も含めて東京に在住・在勤していた親族が多いとはいえ、長男である配偶者を含め彼らの話の輪に入ると自分が単に「嫁」としてだけでない意味で、よそ者であることを痛感させられる場面が少なくない。例えば、どんな相手であれ、方言で話されること自体には何も感じないが、配偶者が私たちの子供に日常的に方言を教え込んでいるたり、私以外全員富山の言葉で地元の話や昔の話をされたりすると、私も意識せざるを得なくなる。また、私の実家は都内の公営集合住宅にあるが、転入直後から定例の草取りに参加したところ後で「大学院生なのに、草取りに参加して偉いわね」と別の住民から言われたことがある。本人が意識するかしないかに関わらず、こうした関係は(いくら学者が「それは社会的に構築されるものだ」と主張しても)、そう意識した本人にとっては本質的に存在するものだ〔吉田 2015b〕。
- (4) 伝聞によるのだが、こうした公共機関や福祉施設等の職員が職務遂行を最優先にしたために家族と連絡を取らない／取れないことで、その後の家族・親族関係の中での立場が難しくなったという例もあるようで、こうしたこ

- とについても議論を深める必要があるだろう。
- (5) 私はケニアに長期間(数ヶ月から1年単位で)滞在してフィールドワークを行った経験があるが、友人として親しくなった相手だと思っ
ていても話をしているうちに「こんな話であ
なたの研究に役立つのか?」と心配されたこ
とがある。日本ではさらにその傾向が強く、「あ
なたの研究にとって役に立たない話かもしれ
ないけれど」「こんな話でごめんなさい」など
と言われることがある。つまり、「研究者」と
いう立場が前面に出てしまえば、相手は「研
究者」側に気遣いをし、「研究者」の目的を窺
いながら話すことになる。これでは本末転倒
であり、そこに「研究者」として自分が存在
するだけで相手に重い負担を強いていること
になるのである。
- (6) 阪神・淡路大震災後の1995年2月に、被災し
た歴史資料の保全を進めるために関西の歴史
学会関係者、大学院生、博物館、文書館、図
書館関係者、郷土史研究者などにより結成さ
れ、地域の歴史文化を担う住民の方々のサポ
ートを受けて活動してきた(歴史資料ネットワ
ークのホームページより)。
- (7) 文化庁による平成24年度「東日本大震災にお
いて危機的な状況が危惧される方言の実態に
関する予備調査研究」、平成25年度「東日本大
震災において危機的な状況が危惧される方言
の実態に関する調査研究事業」、平成26年度「方
言活性化支援事業」を指す[大野・小林 2015:
iii-iv]。
- (8) 同様の例として1923年の関東大震災のときの
「震災イチョウ」が挙げられる。「震災イチョウ」
は一面焼け野原となった東京都心で奇跡的に
生き残ったが、復興事業に伴う区画整理で切
り倒される予定だった。しかし、当時の中央
気象台長が後世に残したいと帝都復興局長官
に申し入れ、別の場所に移植された(千代田区
観光協会「千代田紅葉ブログ」より)。
- (9) 彼も3月11日午後2時46分以降の自身の体験
を書いた一人である。彼の場合「記録も記憶
も変化する」という自身の考えに基づき、彼
自身の記録／記憶として論文上に「創り残し
た」と考えられる。
- (10) 本稿で取り上げる無形民俗文化財調査事業に
おいて、調査を実施したのは「文化人類学、
民俗学、宗教学、環境社会学、地域研究など

の様々な分野」[東北大学東北アジア研究セン
ター 2012: 3]である。ここではこの調査自体
の内容ではなく、この調査のやり方について
調査に携わった文化人類学者がどのように考
えているのかに照明を当てる。

- (11) 宗教者災害支援連絡会。
- (12) ただし、愛知県立大学の亀井伸孝が代表を務
める「応答の人類学」プロジェクト(日本文化
人類学会課題研究懇談会)が2012年にスタート
している。これは「『文化人類学が社会へのい
かなる応答性をもちうるか／いかに応答的で
ありうるか』という問いに答えようとする。
災害・開発・医療・福祉といった、緊急対応
を迫られる現場から長期的な指針の提示を求
められる現場まで、複数の場で模索されてき
た協働的な取り組み事例の検討を中心に、人
類学の社会的な意義を論じる」ものである(応
答の人類学ホームページより)。
- (13) 民俗学者宮本常一は渋沢敬三に「いましめて
いわれたことば」[宮本 2007: 14]として、「…
一つは他人に迷惑をかけないこと。第二は出
しゃばらないこと、すなわちその場で、自分
を必要としなくなったときは、そこにいるこ
とを周囲の人に意識させないほどにしている
ということ…そして第三に他人の喜びを心か
ら喜びあえること」[宮本 2007: 14]を挙げて
いる。

【参考文献】

- 赤坂憲雄・小熊英二(編著)
2012 『「辺境」からはじまる：東京／東北論』、
明石書店。
- 戸江茂博
2012 「今、私たちは教育者・教育研究者として何
ができるか：震災と防災教育」『人間教育の探
究：日本ペスタロッター・フレーベル学会紀
要』24: 59-66、日本ペスタロッター・フレー
ベル学会。
- 平川新
2011 「東日本大震災と歴史の見方」『歴史学研究』
884: 2-7。
- 平川南
2013 「歴史・民俗研究者と東日本大震災」『歴史
と地理』667: 50-54、山川出版社。
- 保立道久
2011 「地震・原発と歴史環境学：9世紀史研究

東日本大震災に際し人文学・社会科学系研究者は何を考え行動し、発信してきたか

- の立場から』『歴史学研究』884: 8-11。
- 今井信雄
2013「震災を忘れていないのは誰か：被災遺物の保存の社会学」『フォーラム現代社会学』12: 98-103、関西社会学会。
- 稲場圭信
2012「東日本大震災における宗教者と宗教研究者」『宗教研究』86(2): 219-242。
- 稲場圭信・黒崎浩行
2011「東日本大震災における宗教者・宗教研究者の連携」『宗教と社会貢献』1(2): 99-105。
- 稲田聡子
2009「情報の『探し手』から『使い手』へ：公共図書館で感じるインフォプロ」『情報の科学と技術』59(5): 222-225。
2012「研究ノート・東日本大震災：図書館/図書館員/日本文化研究者ができること」『語文論叢』27: 88-70、千葉大学文学部日本文化学会。
- 北原糸子
2011「災害にみる救援の歴史：災害社会史の可能性」『歴史学研究』884: 16-20, 26。
- 小林隆
2012a「まえがき」『方言を救う、方言で救う：3・11被災地からの提言』東北大学方言研究センター(著)、ひつじ書房、pp. i-iii。
2012b「なぜ、今、方言なのか」『方言を救う、方言で救う：3・11被災地からの提言』東北大学方言研究センター(著)、ひつじ書房、pp. 1-9。
2012c「あとがき」『方言を救う、方言で救う：3・11被災地からの提言』東北大学方言研究センター(著)、ひつじ書房、pp. 223-225。
- 小松郁夫
2012「東日本大震災を教育学研究者としてどう受けとめるか」『日本教育経営学会紀要』54: 48-54、日本教育経営学会。
- 三宅明正
2011「記録を創り、残すということ」『歴史学研究』884: 54-58。
- 宮本常一
2008「調査地被害：される側のさまざまな迷惑」『調査されるという迷惑：フィールドに出る前に読んでおく本』宮本常一・安溪遊地(著)、pp. 13-34、みずのわ出版。(初出：『朝日講座・探検と冒険』7、朝日新聞社、1972年)
- 荻野昌弘
2013「はじめに」(特集 3.11以前の社会学：阪神淡路大震災から東日本大震災へ)『フォーラム現代社会学』12: 95-97、関西社会学会。
- 小熊英二
2012「まえがき」『「辺境」からはじまる：東京／東北論』赤坂憲雄・小熊英二(編著)、pp. 3-5、明石書店。
- 奥村弘
2011「東日本大震災と歴史学：歴史研究者として何ができるのか」『歴史学研究』884:21-26。
- 大野眞男・小林隆
2015「はじめに」『方言を伝える：3.11東日本大震災被災地における取り組み』大野眞男・小林隆(編)、ひつじ書房、pp. iii-v。
- 定池祐季
2011「東日本大震災と北海道南西沖地震」*MERA Journal*(人間・環境学会誌)14(2): 21-24、人間・環境学会。
- 菅豊
2013『「新しい野の学問」の時代へ：知識生産と社会実践をつなぐために』、岩波書店。
- 高倉浩樹
2014「結：東日本大震災に対する無形民俗文化財調査事業と人類学における関与の意義」『無形民俗文化財が被災するということ：東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』高倉浩樹・滝澤克彦(編)、pp.290-311、新泉社。
- 竹沢尚一郎
2013『被災後を生きる：吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』、中央公論新社。
- 東北大学方言研究センター
2012『方言を救う、方言で救う：3.11被災地からの提言』、ひつじ書房。
- 東北大学東北アジア研究センター
2012『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査 2011年度報告集(第1分冊)』、東北大学東北アジア研究センター。
(http://ir.library.tohoku.ac.jp/re/bitstream/10097/53896/1/Minbu2011_01_A-B.pdf)
- 山内明美
2012「〈飢餓〉をめぐる東京／東北」『「辺境」からはじまる：東京／東北論』赤坂憲雄・小熊英二(編著)、pp. 255-301、明石書店。

矢守克也

2010『アクションリサーチ：実践する人間科学』、
新曜社。

矢田俊文

2011「東日本大震災と前近代史研究」『歴史学研究』884: 12-15。

吉田優貴

2015a「震災からの『自生的再生』をめぐる漁村
の人々の協働と力学：岩手県内のある漁業協
同組合と人々のつながりを事例に」『研究所年
報』、45: 71-89、明治学院大学社会学部附属研
究所。

2015b「『大知識人の神話』を読んで」『竹村民郎
著作集完結記念論集』三元社編集部(編)、ペー
ジ未定、三元社(印刷中)。

【参照ウェブサイト】(2015年10月2日アクセス確認)
CIDIR(東京大学大学院情報学環総合防災情報研究
センター)

[http://cidir.iii.u-tokyo.ac.jp/about_cidir/
sadaike_yuki.html](http://cidir.iii.u-tokyo.ac.jp/about_cidir/sadaike_yuki.html)

一般社団法人千代田区観光協会「千代田紅葉プロ
グ」

[http://www.kanko-chiyoda.jp/tabid/1304/
EntryID/2773/Default.aspx](http://www.kanko-chiyoda.jp/tabid/1304/EntryID/2773/Default.aspx)

応答の人類学：日本文化人類学会課題研究懇談会
(2012)

[http://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~com_reli/
jasca_outou/](http://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~com_reli/jasca_outou/)

歴史資料ネットワーク

<http://siryo-net.jp/>